

平成15年度  
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学・玉川学園女子短期大学

大学FD委員会

無断転載を禁じます。

## はじめに

本学の組織的・継続的なFD活動の歴史はまだ浅く、FDという言葉を用いての具体的な活動は平成11年度から学部を中心に主体的に行われてきました。平成14年4月には、全学的な見地からのFD活動が必要であることから、大学FD委員会を暫定的に立ち上げ、その意義や目的、役割を明確にし、各部の協力を得ながら各種の活動を行ってきました。そして、平成15年4月からは、大学FD委員会を正式な委員会として位置付け、より本格的に推進してまいりました。

いうまでもなく、本来FD活動は他者から強制されて取り組むべきものではなく、大学の教員であれば自発的に高度な教育研究を目指して、絶えず自己の能力の開発・向上に努めているべきものです。少子化の時代、大学間競争の時代、教育の質の保証の時代だからということではなく、常に特色のある、質の高い教育を学生に提供することが基本であることは、いまさら論を待たないことです。本学もこれまでに高い目標を掲げて教育の質の向上を図ってまいりましたが、FD活動を通して、全教員がより高いレベルの教育研究活動ができるよう支援していく所存です。活動の詳細は本文に譲りますが、平成15年度春学期から先生方、学生諸君の協力を得て、学生による授業評価をコア科目で実施することができました。この結果をもとに今後核心に迫った改革を進めていきたいと考えています。

大学FD委員会委員長  
教学部長 後藤昌彦

# 目 次

はじめに .....	1
------------	---

## I 大学FD活動状況と今後の計画

1. 大学FD委員会	
(1) 委員会の目的 .....	5
(2) 委員構成 .....	5
(3) 前年度からの課題（平成14年度報告書「今後に向けて」より） .....	5
(4) 活動状況 .....	6
(5) 活動の成果 .....	6
(6) 今後に向けて .....	7
2. 学部の活動.....	8
➡ 文学部 .....	10
➡ 農学部 .....	12
➡ 工学部 .....	13
➡ 経営学部 .....	14
➡ 教育学部 .....	16
➡ 芸術学部 .....	17

## II 教員研修

1. プレゼンテーション研修	
(1) 実施の概要 .....	18
(2) 実施の状況 .....	18
(3) 実施後のアンケートから .....	19
(4) ディスカッションの実施 .....	22
(5) 実施の成果 .....	23
2. 新任教員研修	
(1) 研修プログラム内容 .....	25
(2) 実施の成果 .....	26

## 大学FD活動状況と今後の計画

### 1. 大学FD委員会

本委員会は今年度で2年目を迎える。昨年の14年度に報告書を冊子にして学内公開しているが、引き続き、今年度においてもその活動を取り纏めた報告書を作成する。

経過が見えるように、あえて前年度と記載を同じくする箇所もあるのでご了承願いたい。

#### (1) 委員会の目的

本委員会は、大学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD活動を行う目的を以下のとおり明確化している。

玉川の教育理念を実現するため。

大学大衆化時代に対応するため。

競争優位性を確保（受験生の大学選択等）するため。

21世紀の玉川教育を支える教員の育成。

#### (2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	野渡正博
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	長野正
委員	芸術学部	林卓行
委員	女子短期大学	中村慎一
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

#### (3) 前年度からの課題（平成14年度報告書「今後に向けて」より）

平成15年度からは大学FD委員会の学内における位置付けを明確にし、同時に規程を制定することを検討している。また、平成14年度実施のプレゼンテーション研修会、新任教員研修会は今後も継続的に実施し、平成15年度以降は外部講師による講演会、教員による授業評価、FDに関する各種研修（国内外）への教員派遣、サバティカル制度、ホームペ

ージの開設等を検討していきたい。

本来FDは自発的に取り組むべきものであり、他者から強制されるものではないが、将来的には自発的・積極的に取り組みやすくなるような、FD活動のための環境整備を充実させていきたい。

#### (4) 活動状況

主な活動内容としては以下のとおりである。特に今年度は学内教職員の意識を高めるために学外講師による講演会を開催した。その内容は本報告書にも掲載している。また、コア科目の「学生による授業評価」を春・秋学期とも全学的に実施した。

なお、大学FD委員会は4回開催したが、詳細として巻末に参考資料(議事要旨)を掲載した。前年度から継続して行っているプレゼンテーション研修は本年度5回開催し、合計38名(前年度からの累積では97名、全専任教員の33%)の教員が参加した。

<平成15年度>

4月1日	大学FD講演会「私大政策の転換と大学評価」(喜多村和之氏)
5月7日	第1回委員会
6月6日	FD関係研究会への教員派遣(中村慎一委員)
7月9~15日	コア科目における「学生による授業評価」アンケート実施
7月30~31日	第1回プレゼンテーション研修
8月4~5日	第2回プレゼンテーション研修
9月10~11日	第3回プレゼンテーション研修
10月1日	第2回委員会
11月12日	第3回委員会
1月14~20日	コア科目における「学生による授業評価」アンケート実施
2月20日	第4回委員会
2月24~25日	平成16年度採用の新任教員研修会
3月2~3日	第4回プレゼンテーション研修
3月16~17日	第5回プレゼンテーション研修

#### (5) 活動の成果

大学FD講演会は全専任教員対象に今年度初めて開催されたものであるが、国立大学の法人化、第三者評価による競争原理の導入と資源配分、学校教育法・私立学校法の改正問題等が及ぼす影響について再認識できた。

プレゼンテーション研修は開始からわずか2年目であるが、すでに教員の3割が受講した。講義法の改善だけでなく、多くの参加者がFD活動に対して能動的な考えをするようになってきたことは成果として挙げられる。学科に特化した内容でプレゼンテーションのスキルアップを継続的に図っていききたいという声も聞かれるようになった。

コア科目における「授業評価アンケート」は今年度2回実施したが、今後数年実施し、データを比較分析した上で成果を確認したい。

新任教員研修会については、開催後アンケートを実施した。全体的には内容が理解でき、着任にあたり大変参考になったという評価を得た。ただし、今後追加してほしいという課題の指摘もあった。

( 6 ) 今後に向けて

平成 15 年度は、当初の計画どおり大学 F D 委員会を大学学則第 41 条に基づく委員会として位置付け、同時に F D 委員会規定を制定した。

今後は研修センターとの調整を図りながら、引き続きプレゼンテーション研修会、新任教員研修会、F D に関する各種研修への教員派遣、コア科目の「授業評価アンケート」、外部講師による講演会を実施していきたい。

なお、検討中のホームページは平成 16 年度中に開設する予定である。

## 2. 学部の活動

平成 15 年度における各学部 F D 活動の状況を一覧にする。

	各学部会の 構成人数	各学部会の 開催回数	学生による授業評価の実施		プレゼンテーション 研修会への 参加者数
			実施回数	教員の参加率	
文学部	4名	1回	1回	46%	13名
農学部	4名	4回 (メール)	2回	春79% 秋74%	8名
工学部	4名	4回	2回	春73% 秋76%	7名
経営学部	23名 (全員)	6回	2回	100%	6名
教育学部	14名	2回	0回	0%	3名
芸術学部	5名	2回	2回	100%	2名
コア科目			2回	100%	

教員の参加率の算出には、専任・非常勤を含める。

文学部において国際言語文化学科は教員の参加率が100%となっている。

平成 15 年度各学部専任教員におけるプレゼンテーション研修の受講修了状況

	15年度専任教員数(A)	Aの中で受講した人数	割合
文学部	77名	32名	41.6%
農学部	43名	18名	41.9%
工学部	63名	15名	23.8%
経営学部	23名	15名	65.2%
教育学部	35名	10名	28.6%
芸術学部	30名	8名	26.7%

専任教員は助手以上。通信教育は含まず。

今後（平成 16 年度～）の計画について、一覧にまとめる。

	今後の計画
文学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現行と同様の取り組みを続ける。研修，研究会などに適宜参加する。</li> <li>・ 新しくなった教室での，I T 機器を使った授業実践報告会のようなものを行いたい。</li> <li>・ 16 年度も継続して，学生による授業評価の実施，F D 研修会の開催等，本学科教員の資質向上を図る機会を積極的に設け，学科発足後 2 年目を迎える本学科の望ましい教育研究活動の在り方を検討していきたい。</li> </ul>
農学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全学委員会と協調して，プレゼンテーション研修会，授業評価アンケートの継続的实施。</li> <li>・ 農学部 F D のあるべき姿を討議し，農学部の路線を明確にする。</li> <li>・ 作成したパンフレットを活用して，F D 概念の啓蒙及び進行ステップを明らかにすることと，その実施。</li> </ul>
工学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業評価の継続実施と開示方法検討（テクノ Festa やインターネットなど）</li> <li>・ 改善提案運動の継続実施（勉学環境をメインに）</li> <li>・ 授業方法の事例報告とハード/ソフトの提案</li> <li>・ 数年後を見すえた学科の方向性（2010 年委員会（仮称））</li> <li>・ 他大学における創成科目教育などの事例研究</li> <li>・ 大学院定員確保のための P R 活動</li> </ul>
経営学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業内容・方法に関する研究（継続）</li> <li>・ 教員研修会の開催（継続）</li> <li>・ 専門科目共同授業に関する研究</li> <li>・ リメディアル教育に関する研究</li> <li>・ 学生確保に関する研究</li> </ul>
教育学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業評価アンケートの完成</li> <li>・ その授業評価アンケートを用いての実施</li> <li>・ 教員養成における F D 活動の検討</li> </ul>
芸術学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学部として実施している「授業評価アンケート」のアンケート回収率が，前年に比して格段に落ちたため，アンケートの意義の啓蒙にいっそう努める。</li> <li>・ 学部完成年度に向けて，専任教員間に学部カリキュラム運営方法に共通理解を持たせると同時に，学生の学習達成度をフォローし記録するよう努める。</li> <li>・ 平成 16 年度から学年別ブラックボードを開設し，学生の付加価値を高め同時に，専任教員の学部教育に対する意識と参加度を高めたい。</li> </ul>



## § 文学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

ある限られた教員のみが活動を担うのではなく、全員が何らかの形でF D活動に参加できる体制にしたい。

### (2) 学部におけるF D活動の組織体制

文学部長を交え、文学部3学科(人間学科, 国際言語文化学科, リベラルアーツ学科)の合同F D委員会を開催している。

#### <国際言語文化学科>

学科運営委員会と授業運営委員会の二つの会議体で学科・授業運営に関わる様々な事項を審議・実施している。

#### <リベラルアーツ学科>

学科運営委員会が中心となって、F D活動の企画と運営に当たっている。

### (3) 15年度の活動内容

#### 学生による授業評価への取り組み

##### <人間学科>

比較的小規模の学科であり、それに応じて学科で開講しているクラスのサイズもそれほど大きくはない。そのため、各教員が日常の授業における学生からの質問や課題レポートの添削・評価あるいは、レポートの内容に関する面接を行うなどの工夫を通して学生がどのように授業を評価し取り組んでいるかを把握するよう努めている。これを通して授業の内容に関して学生からのフィードバックを得ている。

##### <国際言語文化学科>

昨年に続き、第2回目のアンケート調査を7月上旬に行った。対象科目98科目、学生総数総数2920名。1科目を除き全てに回答があった。アンケート結果は授業ごとに担当教員に知らせると同時に、6つのカテゴリーについて授業運営委員会で分析した。アンケート結果は学園のホームページに公表した。

##### <リベラルアーツ学科>

春・秋各学期終了時に、学科所属の全学生を対象に、次の点に関するアンケート調査を実施し、カリキュラムおよび授業運営の改善を試みた。

- a. 全般的な時間割の組み方、履修できる科目の種類等
- b. (受講した科目全般について) 教員の授業の進め方等
- c. 学生自身の授業への取り組み方(自己評価)
- d. 科目「リベラルアーツ入門」(全員必修)
- e. 各導入科目

#### 研修活動の組織的な取り組み

##### <人間学科>

それぞれ4名ずつの教員で担当している，1年生対象の必修科目1つ，2年生対象の必修科目2つについて，教材またはテキストの選択から授業の進め方 評価法について，定期的に検討会を行いながら進めている。

##### <国際言語文化学科>

プレゼンテーション研修に4名が参加。私立大学情報教育協会主催「授業情報技術講習会」(8月4日～6日。於:千葉工業大学)に学部長の山崎真稔先生が参加。今後も学内，学外の研修の情報を学科に流し，積極的に参加を促していきたい。

##### <リベラルアーツ学科>

新たに発足した本学科を今後どのように運営し，各教員がどのように教育研究活動に当たるべきかについて，学科全体が一丸となって検討した。学科発足間もない5月23日には箱根富士屋ホテルにて，ほぼ全員の教員が参加して，前述の点に関するFD関連の会議を開催し，活発な論議が展開された。また，年度末の2月23日には小田急ホテルセンチュリー相模大野にて，全教員が参加してFD研修会を実施した。この研修会では，まず，本学科の特色科目「プロジェクトセミナー」の具体的な内容と進め方を検討した。次に，大学に対する第三者評価の導入が考えられていることに鑑み，日本IBM株式会社の北村司氏を講師に招き，「社会の求める人材とリベラルアーツ」と題する講演会を実施し，講演後全体で討論した。

#### その他の取り組み

##### <人間学科>

第3回大学教育研究集会のFD研究部会(京都大学)および京都大学高等教育研究開発推進センター主催第10回大学教育改革フォーラムに3名の教員が参加した。

#### (4) 今後の予定や課題

##### <人間学科>

上記のと同様の取り組みを続ける。上記のを今後も続ける。上記のよな研修，研究会などがあれば適宜参加する。

##### <国際言語文化学科>

新しくなった教室での，IT機器を使った授業実践報告会のようなものを行いたい。

##### <リベラルアーツ学科>

16年度も継続して，学生による授業評価の実施，FD研修会の開催等，本学科教員の資質向上を図る機会を積極的に設け，学科発足後2年目を迎える本学科の望ましい教育研究活動の在り方を検討していきたい。

## § 農学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

- ・ 全学F D委員会と協調しながら、プレゼンテーション研修会などに参加し、また、学生による授業評価を行う。これらを通じて、教員の教育技能開発を進める。
- ・ 若手教員の学位取得に結びつく活動を技能開発と捉え、援助・助成する。

### (2) 学部におけるF D活動の組織体制

大学F D委員（松香）、農学研究科長（佐々木）、生物資源学科2名（露木、小野）、応用生物化学科2名（堀、八並）計6名から構成する。

### (3) 15年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

- (ア) コア科目以外に、学部長の方針により、春semester終了時に、全員の協力を求め、生物資源学科19名、応用生物化学科15名、計42科目について実施した。総合評価の平均は3.75であった。
- (イ) 同上、両学科それぞれ16名、型46科目で実施し、平均評価は3.91であった。

研修活動の組織的な取り組み

全学F D委員会とタイアップしながら、学部行事と重なった時を除く4回のプレゼンテーション研修会に各回両学科から1名ずつ参加した。

その他の取り組み

学位を取得する活動計画に従って、若手教員の能力開発援助を行った。

(一部の実験経費、論文製作指導に関わる旅費等の助成)

(この制度と直結するわけではないが)数名の学位取得者を出すことができた。

### (4) 今後の予定や課題

全学委員会と協調して、プレゼンテーション研修会、学生による授業評価の継続的实施。

農学部F Dのあるべき姿を討議し、農学部の路線を明確にする。これは、来るべき第三者評価に備えるものという学部長の方針による。

作成したパンフレットを活用して、F D概念の啓蒙及び進行ステップを明らかにすることと、その実施。

## § 工学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

玉川大学工学部で社会的にインパクトの大きい、優秀な全人的技術者を育成するために、工学部の教育や教育環境の改善をおこなう。

### (2) 学部における F D活動の組織体制

工学部自己点検委員会として、活動する。

各学科から各 1 名、計 4 名の体制で構成する。

### (3) 15 年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

平成 14 年度から本格実施開始

春セメスタと秋セメスタ順調に実施

評価方法・評価項目の継続実施

授業評価報告書の発行

研修活動の組織的な取り組み

特になし

その他の取り組み

設備改善提案

自己点検ニュースの発行

授業事例および提案

### (4) 今後の予定や課題

授業評価の継続実施と開示方法検討（テクノフェスタやインターネットなど）

改善提案運動の継続実施（勉学環境をメインに）

授業方法の事例報告とハード/ソフトの提案

数年後を見すえた学科の方向性（2010 年委員会（仮称））

他大学における創成科目教育などの事例研究

大学院定員確保のための P R 活動

## § 経営学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

質の高い卒業生(経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生)の輩出。

リベラルアーツを基盤とした経営学教育の実現。

21世紀社会に生き残ることのできる経営学部 - 少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部の形成。

玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部の形成。

### (2) 学部におけるF D活動の組織体

学部の専任教員全員が参加するF D会議 - 隔月一回，教育研究会および研究発表会の形式で開催。

経営学部教員研修会 - 春学期一回(専任教員のみで開催)，秋学期一回(専任教員および非常勤教員で開催)

全学F D委員会経営学部会 - 各学期に一回，学部の教育システムを確認，検討するために開催。

### (3) 15年度の活動内容

学生による授業評価への取り組み

春学期：「学生による授業評価アンケート」希望教員のみで実施 - 経営学部ホームページでアンケート結果を公開中

秋学期：経営学部専任教員全員が「学生による授業評価アンケート」を実施 - 経営学部ホームページでアンケート結果を公開予定

研修活動の組織的な取り組み

経営学部F D会議

- ・ 授業比較研究 - 「経営学」と「企業と人間」
- ・ 一年次教育研究 - 「University 101/102」の実施に向けて
- ・ 研究報告
- ・ 「学外F D研修会」参加報告

経営学部教員研修会

- ・ 第2回教員研修会(8月実施)
  - 基調講演「F D活動の流れ - シラバス作成の秘訣」切田節子学術研究所講師
  - 授業内容・方法検討会(経営関連科目門/経済関連科目部門/経営情報関連科目部門/国際社会・政治・英語関連科目部門)
  - 学生指導検討会(教務指導/学生生活指導等)
- ・ 第3回教員研修会(3月実施)

- 基調講演「変化する学生像 - 日米比較をとおして」月岡邦夫工学部教授
- 講演「玉川大学のめざしてきたもの - 大学改革のあゆみ」川野秀之経営学部長
- ブラックボード・システム講習会

#### その他の取り組み

第3回英語科目担当非常勤教員研修会の開催

・経営学部の語学（英語）教育方針説明会

・語学（英語）授業方法検討会

就職指導検討会の開催

インターンシップ検討会の開催

経営学部新カリキュラム検討会の開催

#### (4) 今後の予定や課題

授業内容・方法に関する研究（継続）

教員研修会の開催（継続）

専門科目共同授業に関する研究

リメディアル教育に関する研究

学生確保に関する研究

## § 教育学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

教育学部では、「教育の玉川」という伝統をふまえ、学校教育はもちろん、生涯教育、社会教育などの諸分野で幅広く活躍できる教育プロフェッショナルの育成を目指したカリキュラムを導入している。教員がそのカリキュラムを実現できる力量や姿勢を向上させることが、教育学部F D活動の主たる目標である。これを基本方針として、平成15年度から新設される乳幼児発達学科を含めた教育学部F D活動の目標を今後つめてゆく。

### (2) 学部におけるF D活動の組織体制

教育学部長、学科主任、教務主任、学生主任、教務・教職担当で組織する。

### (3) 15年度の活動内容

#### 学生による授業評価への取り組み

教育学部の特性に適した授業評価アンケートについて検討し、アンケート用紙の素案を作成した。学生が自分自身の取り組み、授業に関する理解や今後の課題などについて確認すると共に、学生自身のリフレクションを教員が理解して授業改善の具体的な資料となる項目を多く用意した。正式なフォームについてはさらなる検討をくわえる。

#### 研修活動の組織的な取り組み

前年度同様、教務・教職担当者会において、適宜検討した。

#### その他の取り組み

学生の学習上の便宜や授業改善のために、次のような設備を新設した。

- ・教職研究室を教育学部校舎に移転し、学生や教員が同研究室の先生方とコミュニケーションをとりやすいようにした。
- ・教職専用の掲示板の設置。

### (4) 今後の予定や課題

#### 授業評価アンケートの完成

#### その授業評価アンケートを用いての実施

#### 教員養成におけるF D活動の検討

## § 芸術学部

### (1) F D活動への取り組み理念・目標

学部として設定した理念の、より高度な達成に資するようF D活動を行う。

### (2) 学部におけるF D活動の組織体制

学部長を筆頭に、ビジュアル・アーツ学科主任，パフォーミング・アーツ学科主任。  
大学F D委員会との連絡役として，学部選出の大学F D委員で組織する。

### (3) 15年度の活動内容

#### 学生による授業評価への取り組み

前年秋季学期からと同様に，春学期・秋学期の学部開講科目すべてに対してWEBを利用した授業評価アンケートを行った。

#### 研修活動の組織的な取り組み

学部新任教員2名(パフォーミング・アーツ学科1名，ビジュアル・アーツ学科1名)に対し，学部長および各学科主任が共同で新任教員研修を行った。

#### その他の取り組み

前年度に続き，学部に割り当てられた共同研究費を使って，F Dをテーマとする研究を実施。海外大学の調査と，海外大学在籍教員の招聘を行った。本年度はビジュアル・アーツ学科林三雄助教授がロンドン大学ゴールド・スミスカレッジのデザイン学科・美術学科を調査した。

### (4) 今後の予定や課題

学部として実施している「授業評価アンケート」のアンケート回収率が，前年に比して格段に落ちたため，アンケートの意義の啓蒙にいっそう努める。

学部完成年度に向けて，専任教員間に学部カリキュラム運営方法に共通理解を持たせると同時に，学生の学習達成度をフォローし記録するよう努める。

平成16年度から学年別ブラックボードを開設し，学生の付加価値を高め同時に，専任教員の学部教育に対する意識と参加度を高めたい。



## 教員研修

---

### 1. プレゼンテーション研修

#### (1) 実施の概要

平成14年から始まった当該研修も2年目に入って軌道に乗り、運営、事務処理、会場設営など順調に行うことができた。実施回数は昨年同様5回であるが、昨年の反省を踏まえて、1クラス当たりの参加者を10名以下に絞ったため、参加合計人数は38名となった。人数だけをみると昨年より21名減という結果であるが、その分、研修内容が充実しただけでなく、余裕のある運営ができ、10名程度が適正人数であることが明確になった。

2日間、朝9時から17時までの日程で、演習が中心である。研修の内容については、後述「B. 研修の概要」の通りであるが、特記すべきことは、ビデオを使った演習方法と、他の参加者による評価である。ビデオで客観的に教壇での自分の姿を観察することや、同僚である教員を前に模擬授業を行い、評価されるということは、大学という場ではなかなか経験できないことであり、それだけ成果も大きい。

また、上述のとおり人数制限をしたため、2日目にディスカッションの時間を取ることが可能になった。その内容は「(4) ディスカッションの実施」で後述するが、学部や学科を越えた教員間のコミュニケーション向上に有効であっただけでなく、各教員にFDについて熟考していただくきっかけになったと考えられる。現状では、FD研修＝プレゼンテーション研修と捉えがちであるが、お互いに話し合うことによって、FD活動全体の理解を深めることに効果があった。

アンケート結果やフリーコメントなどから、ほぼ期待通りの成果があったと考えられる。ただし当該研修の目標は、あくまで改善点について自ら気づき、改善努力の意識をもつことにとどまる。最終的には実際に改善し、より効果的な授業を実施しなければ意味がない。それは、一人一人の教員の努力にゆだねるしかないという研修の限界を認識し、幅広いFD活動を継続していくことが重要である。そういう意味で、当該研修は、FD活動の最初の一步であり、今後は別の方法でFDの第二步・第三步と歩を進めていく必要がある。

#### (2) 実施の状況

開催の日程、参加人数、開催場所は、以下のとおりである。各クラスごとの参加者詳細は「参加一覧」参照のこと。

- ・第1回： 7月30日(水)～31日(木) 6名 経営学部校舎204
- ・第2回： 8月04日(月)～05日(火) 6名 経営学部校舎204
- ・第3回： 9月10日(水)～11日(木) 9名 経営学部校舎204
- ・第4回： 3月02日(火)～03日(水) 8名 経営学部校舎204
- ・第5回： 3月16日(火)～17日(水) 9名 経営学部校舎204

(3) 実施後のアンケートから

アンケート項目は昨年と同じで、項目ごとにA～Eまでチェックするものとフリーコメントの両方からなる。

(3) - 1 チェック項目の集計結果

以下は、チェック項目の結果である。「#」はクラス番号で、その列の第6行、「計」(網掛け行)は5クラス分の合計である。「点」はA=5, B=4, C=3, D=2, E=1として平均を出したものである。

参考のため、昨年度の平均を最終行に載せた。合計人数の違いがあるにしても、全体として満足度が高くなっていることが分かる。すべての項目で昨年平均より点数が上がっていることだけでなく、5.0という満点が8(昨年は2)クラス分あること、Dがわずか6件(昨年は30件)で、Eは0件(昨年は3件)であることから、評価が高くなっていることがわかる。これは、上述のように適正人数での運営によること多いと考えられる。

全体について

総合満足度								授業に役立つか								スキルは向上したか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1				6	4.8	1	1	5	1			6	4.6	1	1	4				5	4.2
2	5	1				6	4.8	2	4	2				6	4.7	2	2	4				6	4.3
3	9					9	5.0	3	8	1				9	4.9	3	2	6	1			9	4.1
4	8					8	5.0	4	8					8	5.0	4	2	5	1			8	4.1
5	7	1	1			9	4.7	5	7		1			8	4.8	5	5	3		1		9	4.3
計	34	3	1	0	0	38	4.9	計	32	4	1	0	0	37	4.8	計	12	22	2	1	0	37	4.2
昨年	41	15	2	1	0	59	4.6	計	43	14	2	0	0	59	4.7	計	10	38	6	4	0	58	3.9

研修会の質について

講習内容								講師								テキスト, 教材, 教具							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1				6	4.8	1	5	1				6	4.8	1	5	1				6	4.8
2	3	3				6	4.5	2	6					6	5.0	2	5	1				6	4.8
3	5	3	1			9	4.4	3	8	1				9	4.9	3	6	2	1			9	4.6
4	7	1				8	4.9	4	8					8	5.0	4	7					7	5.0
5	6	2		1		9	4.4	5	8	1				9	4.9	5	8	1				9	4.9
計	26	10	1	1	0	38	4.6	計	35	3	0	0	0	38	4.9	計	31	5	1	0	0	37	4.8
昨年	36	17	3	2	0	58	4.5	計	51	6	1	0	0	58	4.9	計	40	17	2	0	0	59	4.6

### 研修会の運営について

日程								時間配分							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	4	2				6	4.7	1	5	1				6	4.8
2	4	2				6	4.7	2	5	1				6	4.8
3	4	3	2			9	4.2	3	7	2				9	4.8
4	6	1	1			8	4.6	4	7	1				8	4.9
5	6	1	2			9	4.4	5	7	1	1			9	4.7
計	24	9	5	0	0	38	4.5	計	31	6	1	0	0	38	4.8
昨年	28	19	3	5	3	58	4.1	計	40	16	2	1	0	59	4.6

昨年は、日程を不満とする人が多く、D、E評価合をあわせて8件あったが、今年は0である。

### 場所および事務連絡について

開催場所								事務処理・連絡							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	2	3				5	4.4	1	3	2				5	4.6
2	3	2	1			6	4.3	2	2	2	1	1		6	3.8
3	6	2	1			9	4.6	3	3	5		1		9	4.1
4	6	2				8	4.8	4	5	3				8	4.6
5	5	3		1		9	4.3	5	3	4			1	8	4.0
計	22	12	2	1	0	37	4.5	計	16	16	1	2	1	36	4.2
昨年	17	24	6	6	0	59	3.6	計	14	20	15	7	2	58	3.6

開催場所の昨年のポイントが低いのは、聴覚センターの地下教室だったことに起因する。経営学部に変更してからは同程度のポイントが続いている。事務処理に関するポイントは大幅に向上した。昨年来の改善活動が功を功したと思われる。

### 研修会の開催について

研修を継続すべきか								他の人に参加を勧めるか							
#	A	B	C	D	E	計	点	#	A	B	C	D	E	計	点
1	5	1				6	4.8	1	5	1				6	4.8
2	6					6	5.0	2	6					6	5.0
3	7	2				9	4.8	3	8	1				9	4.9
4	8					8	5.0	4	8					8	5.0
5	7	1		1		9	4.6	5	7		1			8	4.8
計	33	4	0	1	0	38	4.8	計	34	2	1	0	0	37	4.9
昨年	46	9	2	2	0	59	4.7	計	41	14	2	2	0	59	4.6

当該研修会についてのポイントは昨年と大きな相違はないが、コメントとして「さらに継続してレベルアップを図るべき」というような、より一歩前向きな意見が書かれていたことが今年の特徴である。

### (3) - 2 フリーコメント概要

アンケートは、項目別のポイントも意味があるが、それ以上にフリーコメントに参加者の本音が表現される。集計には労力を要するが、多くのメッセージを含むこれらのコメントを大切に、今後もより身近で役に立つ研修を提供していきたいと考えている。

フリーコメント全ての集計を記載することはスペースの関係で省略するが、主だった項目ごとのコメントを、抜粋して記載する。

「有用性」については、研修が役立つというコメントが40件以上あった。以下に、特に多かったコメントをあげてみる。(括弧内は件数)

- 全体として充実した有益な研修であった (10件)
- 自分自身をビデオで客観的に見たことが有効だった。(8件)
- 他学部の教員同士の交流が図れたことがよかった。(4件)
- 自分の改善点を認識し、改善課題が明確になった。(4件)
- 他学部の教員の模擬授業が役立った。(4件)

その他、「今後、授業改善に取り組んでいきたい」、「プレゼンテーション・スキルを向上させたいと思った」といった前向きな感想や、「資料の提示方法が役立った」など具体的な研修内容を挙げて有効だったという意見も多々あった。

「運営」に関するコメントは概ね好意的なものであった。昨年多かった悪いコメントは、皆無であった。人数制限したため運営に余裕ができたことが幸いしたのだと思う。否定的なコメントとしては、10時開始がよい(1件) 4時終了がよい(1件)といったものだけであった。これらのコメントについては、内容との兼ね合いを説明し、ご理解を求めている。

「講師」および「内容」に関しても好意的なコメントが多かった。講義が理解しやすかった(10件)、というものが一番多く、悪いコメントは皆無であった。内容に関する否定的なコメントは、内容を教育の場に特化してほしい(2件)というものだけであった。このしかし一方では、ビジネスにも教育にも共通する基本的な内容としては適切であるというコメントもあり(4件)、今後バランスを図って軌道修正していきたいと思っている。

「開催場所」については、昨年度も視聴覚センターの地下教室から経営学部401教室にしてから悪いコメントはなくなっている。今年は「ネットワークを使いたい」「学園の中央部がよい」「板書しにくい」といった具体的なコメントが1件ずつあった。また、通常使用している教室と格差がありすぎる(3件)というものもあるが、これについては贅沢なコメントと考えてよいと思う。

「日程」については、昨年同様、「2日は長い」「2日は短い」「2日連続でなく間隔をおくほうがよい」「2日連続に意味がある」など相反する意見が見られるが、「2日間は適切である」(3件)より、「2日間は短すぎる」(8件)というコメントが上回ったことは意外であった。プ

プレゼンテーションのスキルを向上させるには2日間では短いのは事実である。こうしたコメントが増えたということは、参加者のプレゼンテーションに対する理解が深まったと考えることができる。ただし、この研修はきっかけであればよいので、そういう意味では2日間が適切と考えよいと思う。

「参加形態」については、「強制的に参加させるべきである」「全教員に義務づけるべきである」など全員参加に賛成するコメントがみられただけでなく、1回限り参加するのではなく、継続的に時期をおいて参加し、スキルアップを図るべきである、学部内で同様の研修をする必要があるなど、この研修会を発展させるような前向きなコメントが8件もあった。特に、学部または学科に特有な要件や条件の下での講義は、こうした全体の研修ではカバーできない面があるので、是非、学部や学科で同様の研修会を実施してほしいと願っている。

「開催時期」については、1年間の開催予定を年初に明示したため、否定的なコメントは採点の時期をはずしてほしい(1件)のみであった。参加者が都合に合わせて日程を自由に選択できることがよい結果に結びついたと思う。

「事務連絡」に関する悪いコメントは7件だけで、昨年(22件)から大幅に減った。特に昨年多かった「連絡が遅い」といったクレームは1件のみで、昨年来、いろいろと改善し、極力早めの情報開示に努めたことがよかったと思う。ただ、連絡が早すぎて忘れてしまう、といった昨年にはないコメントが出てきたことで、丁度よいタイミングの難しさを感じる。

#### (4) ディスカッションの実施

2日目の午前中に1時間程度の意見交換の場としてディスカッションを行うことができた。プレゼンテーションのみでは聞けなかった本音の意見も出され、よいコミュニケーションを図ることができた。

今までFDについて関心の薄かった方々が、話し合いを通じてFD活動に対する関心を深め、さらにFDに関する共通理解を図ることができたことは、大きな成果だと思う。ここで出された意見を要約・抜粋して以下に列挙する。

##### FD活動について

- ・FD活動を積極的に実施するには、もう少し組織的にするべきである
- ・本当にFDをするには、教員にももう少し余裕が必要である
- ・研修を担当する人材をもっと増やすべき
- ・この研修会を一人で実施するのは限界がある
- ・FD活動の内容をもっと学生に説明するべき(広報)
- ・学部・学科を越えてのコミュニケーションの場をもっと必要である

##### 学生評価について

- ・学生評価の結果を公開するべきである
- ・学生評価の前にアンケートの意義や記入の仕方を教育するべき

- ・ 学生評価はよいが、改善策が具体的に出てこない
- ・ 学生の消費者意識が強くなっているが、履き違いがある
- ・ 教えてもらうのは当たり前、という考え違いを直すべきである
- ・ 教員の努力も理解してもらう必要がある

#### 当該研修会について

- ・ この研修をこれで終わりにせず、ステップアップのクラスが必要
- ・ もっと具体的な howto の研修が必要である
  - 例：私語の対処，携帯電話の対処，眠らせない工夫，大教室での工夫
- ・ 具体的なものは教える内容や教室によって異なるので，学部や学科でやるべき
- ・ もっと学部や学科に特化した内容で，研修を自発的にするべき
- ・ 10 分ではなく 1 コマ全体を評価するような研修があればよい
  - それは学部や学科で実施すべきで，全体としてはこの程度でよい
- ・ 特定の学科で開催するときに協力してもらえるとよい
- ・ 教員間の意見交流の場として評価できる

#### その他

- ・ シラバスについて検討するような研修も開催するべき
- ・ 研修センターの研修に教員が出やすいように工夫してほしい
- ・ 予習・復習を 1 時間ずつするには，どうすればよいのか

今年はいくつかの意見を収集することだけであったので，特にこれらの意見から活動を起こすことはしないが，来年度には何か F D 活動の拡大につながればよいと考えている。

#### ( 5 ) 実施の成果 ( 14 年度からの実施を含む )

定量的な成果を示すことはできないが，昨年に比べて当該研修の知名度と理解度は向上したと考えることができる。また，ディスカッションの中での意見からも分かるように，多くの参加者が F D 活動に対して能動的な考えをするようになってきていることも成果と考えてよいのではないかなと思う。

ただ残念ながら，「考え」が能動的になっただけで，「行動」として現れるにはいたっていないのは事実である。すでに個人レベルでは，能動的に活動しているのであるから，これがグループとしての活動に結びつく日も遠くないと考えることができる。たとえば，特定の学科で当該研修会を修了した数人の教員がお互いに授業を評価しあってスキルアップを図る，といった活動が出てくれば幸いである。そのときには，担当者として協力を惜しまないつもりである。そうした基盤作りのためにも，当該研修を地道に続けていくことが大切であると考える，来年度も引き続き努力していくつもりである。

平成15年度 プレゼンテーション研修会参加者一覧

学部	学科	参加者氏名(敬称略)					累積数 (人)
		第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	
文	人間学科						2
	国際言語文化学科	大内 博	花 永明	松本 博文	遠藤 充信	山崎 真稔	12
	リベラルアーツ学科	西山 重徳		大原 征而			8(6)
	(教育学科)	大谷 千恵				川本 和孝	5
	(英米文学科)			青木 敦男	飯村 龍一		2
	(外国語学科)						1
農	生物資源学科		関川 清広	谷本 亮	安部 直重	稲津 厚生	9
	応用生物化学科		小川 人士	富田 信一	河野 均	江澤 真	9
工	機械工学科			似内 昭夫			4
	電子工学科			山本 庸介	寺沢 充夫	塩澤 秀和	5
	情報通信工学科			森 晃徳			2
	経営工学科					伊藤 和憲	3
経営	国際経営学科	小林 幸夫	青木 道代		永井 一志	喜治 都	15
			大西 清彦			二宮 智子	(1)
教育	教育学科			赤堀 実	金井 茂夫		6
	乳幼児発達学科	小林 亮					4(3)
芸術	ビジュアル・アーツ学科				高橋 正晴		5
	パフォーマンス・アーツ学科	深山 尚久	菊地 芳子			岡野 哲也	5
短期大学	教養科	(該当なし)					-
	幼児教育科						-
計(人)		6	6	9	8	9	97

累積数は平成14～15年度の累積。

( )は表記の学科所属で受講し、現時点において他学科へ異動している人数で内数。

## 2. 新任教員研修

平成 16 年度採用の新任教員（助手以上）に対し、2 日間の日程で研修センターの協力のもと研修会を実施した。この研修会は 14 年度より開始されたもので、2 年目の開催となる。参加者 16 名（内 1 名欠席、1 名は 24 日のみ出席）で、2 日間の日程で行われた。

日 時：平成 16 年 2 月 24 日（火）～ 25 日（水）10:00～17:00

場 所：経営学部校舎 204 教室

対 象：平成 16 年度採用の助手以上の新任教員

研修目的：玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・教育方針に対する理解を求め、専任教員としての業務を支障なく遂行できるよう、また新しい時代に向けた学園の発展に貢献していただけるよう協力を求める。

### (1) 研修プログラム内容

【2月24日（火）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	玉川の教育理念と教育方針		学長
10:30	映画「新教育の開拓者 - 小原國芳」	C D	研修センター
11:10	休憩		
11:20	玉川大学の概要、専任教員の業務（各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導等）、FD活動の現状	・平成 16 年度大学運営組織 ・学生指導要項 ・各種会議体	教学部長
12:10	昼食（大学研究室棟ラウンジ）		
13:30	玉川学園の組織機構と関連する業務研究費と出張（国内外）の手続等について	・組織図	教学部 事務部長
14:00	ノーツシステム、教育博物館・小原記念館施設について	・ノーツアカウント申請書 ・教育博物館パンフレット ・小原記念館訪問のしおり	教務課長
14:30	玉川大学紹介ビデオ	V T R	
14:50	休憩		
15:10	教学インフォメーションについて 個人研究費、学部予算・執行について J C B 法人カードと経費講座について	平成 15 年度教学インフォメーション	学務課長
15:40	年間授業計画、カリキュラムの概要（コア・科目、選択科目群）、学則・規程等（ノーツ掲示板の利活用、授業、休講、補講・試験、成績等）	・平成 15 年度学生要覧 ・始業にあたって（専任用）	授業運営課長
16:30	校歌紹介	校歌 C D，楽譜	芸術学部 江口教授
16:40	質疑応答		教学部長 教務課長



【2月25日（水）】

時間	内 容	資 料	担 当
10:00	研究者情報システムについて	操作手順書	教務課長
10:30	服務等について		総務部人事課
11:00	休憩		
11:10	大学における授業運営について ・シラバスについて		研修センター 切田講師
12:00	昼食（大学研究室棟ラウンジ）		
13:00	シラバスについてのグループ討議		研修センター 切田講師
15:00	発表		
16:10	講評		
16:20	研修センターについて		研修センター
16:50	閉会		齋藤副センター長

（２）実施の成果（14年度からの実施を含む）

実施後のアンケート調査によると、研修内容について参加者の86%が充実していたと回答している。とりわけ、専任教員としてスムーズな業務遂行ができるよう多くの情報を得ることができ、また、参加者同士の交流がもてたことが良かったという意見が多かった。しかし、一方で以下の事項について改善が必要と思われる意見があった。

ネイティブの参加者に対する説明の方法や配布資料。

参加者名簿を配布し、全員の自己紹介の時間を設ける必要がある。

社会人登用者に対しては、シラバス作成に関する事前説明が必要である。

着任後1ヶ月位経った時点での研修の必要性。

以上、参加者のみならず主催者側にとっても成果があったと考えられる。

## 平成15年度 玉川大学 FD 委員会委員

委員長	教学部長	後藤昌彦
副委員長	農学部	松香光夫
委員	文学部	藤田裕二
委員	工学部	野渡正博
委員	経営学部	菊池重雄
委員	教育学部	長野正行
委員	芸術学部	林卓行
委員	女子短期大学	中村慎一
アドバイザー	学術研究所	切田節子
事務担当	教学部	稲葉興己
事務担当	教育調査企画部	齊藤文則

---

2004 年 5 月発行

発行 大学 FD 委員会（玉川大学・玉川学園女子短期大学）

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802（教学部教務課）

042-739-8899（教育調査企画部学校調査課）